

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：33929

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500714

研究課題名(和文) 剣道の国際的普及をめぐる韓国ヘゲモニーに関する基礎研究

研究課題名(英文) Basic research into Korean hegemony on the international diffusion of Kendo

研究代表者

小田 佳子(Oda, Yoshiko)

東海学園大学・スポーツ健康科学部・准教授

研究者番号：30584289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本剣道(KENDO)と韓国剣道(KUMDO)の文化的・競技的相異点を解明し、日本剣道(KENDO)の韓国への伝播および変容過程を明らかにした。

剣道の国際的普及の背景には、近年、韓国剣道(KUMDO)が競技力を高め、世界剣道選手権大会において日本剣道KENDOとの激しい覇権争いを演じている現状がある。剣道を巡る出自・歴史・政治の各側面から、ヘゲモニー問題という文化摩擦が生じた。日本剣道(KENDO)の国際的普及と韓国剣道(KUMDO)の国際化の方向性の相違が、文化普遍主義的な展開を目指す日本剣道(KENDO)と文化相対主義に訴える韓国剣道(KUMDO)との軋轢となっている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to firstly clarify the differences on the cultural and competitive aspects between Japanese KENDO and Korean KUMDO, and secondly to clarify the propagation and transformation process from Japanese Kendo to Korean Kumdo.

On the international diffusion (dissemination) of Kendo, there is the current situation of the heavy hegemony conflict between Japanese Kendo and Korean Kumdo in the World Kendo Championships due to Korean Kumdo teams' improvement in competitiveness. The hegemony conflict has caused cultural friction from its birth, history, politics and other aspects surrounding Kendo.

The differences of the directions between international dissemination of KENDO and the internationalization of KUMDO has clearly become a source of friction caused by the Japanese KENDO aimed at cultural universalism and Korean KUMDO of cultural relativism.

研究分野：身体教育学

キーワード：日本剣道KENDO 韓国剣道KUMDO 国際的普及 文化変容 ヘゲモニー

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 「剣道は、日本の伝統文化であり、世界に誇るすばらしいものである」と、剣道大会の開会式では、大会会長挨拶などでこの表現が自画自賛的に用いられるが、「剣道の何が世界に誇るべき伝統文化なのか」を明確に説明できる実践者や専門家ほどのくらしいのだろうか。剣道の国際組織について概説すると、国際剣道連盟 International Kendo Federation (現在 FIK、発足時 IKF) が、「剣道の国際的普及振興をはかり、合せて剣道を通じ加盟団体相互の信頼と友情を培うことを目的」として、1970 年に 17 カ国・地域の加盟で結成された。同時に、第 1 回世界剣道選手権大会 (World Kendo Championship : WKC) が日本で開催された。以後 3 年に 1 度、世界各都市で開催されている。そして 41 年の歴史を刻んだ 2011 年 8 月には、53 カ国・地域が加盟、またその他の未加盟国 (加盟は 50 人以上) が 46 カ国・地域あり、合計すると世界の 99 カ国・地域に剣道が普及していることになる。

(2) 今まさに、世界各地に剣道が伝播したことによる国際化とも言える波が日本に押し寄せている。特に、大きな波のうねりとなって日本に迫っているのが韓国である。韓国は、より国際的なスポーツ組織としての韓国剣道 KUMDO のオリンピック競技化を標榜している。奇しくもベネットは「剣道の黒船—韓国」とこれを形容している。(3) 武道に内在する終着の思想は、自己の内にあるとし、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」とする理念と、スポーツ化された剣道との乖離をどのように克服できるかが問われる。つまり、日本剣道 KENDO に対し、国際的に競技化された剣道をどのように理解、把握すべきかが問われている。一般的に、ある伝統文化の伝播/伝承/受容には摩擦や軋轢が生じることは文化人類学の知見である。日本の伝統文化である剣道 KENDO が世界各国に向けて伝播していく過程にも、様々な文化摩擦や軋轢が生ずることは間違いない。その 1 つに、日本剣道 KENDO の国際的普及をめぐる韓国剣道 KUMDO とのヘゲモニー争いが浮き彫りになる。

## 2. 研究の目的

日本の伝統文化・身体文化であると自負される剣道は、今、国際舞台の中で転換期を迎えようとしている。隣国の韓国剣道 KUMDO が競技力を高め、国際的な大会において覇権争いを演じつつある。現在は、剣道を巡る出自、歴史、文化、社会の各側面から、そのヘゲモニー問題という文化摩擦が生じ始めている。そこで本研究では、国際的な剣道界に台頭した韓国剣道 KUMDO に着目し、これまでの日本剣道 KENDO の国際的普及における、日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の文化的・競技的相異点を解明し、剣道の韓国への伝播そして変容過程を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

平成 24 年度は、剣道における伝統文化論の諸説について、武道学研究及び文化人類学の分野における関連する文献を精読し、伝統文化論と剣道との関連を検討する。日韓両国の剣道に関する歴史と現状について、韓国における剣道普及の実態を把握するために、FIK に加盟する大韓剣道会に研究調査協力を依頼し、韓国での剣道全国大会視察及び韓国武道学会所属研究者の協力により学術関連文献の資料収集を行う。

平成 25 年度は、日本剣道 KENDO の国際的普及の方向性について、体育スポーツ哲学研究 (2012, Vol.34-2) で論文を発表する。日本剣道 KENDO の国際的普及が文化普遍主義に依拠する困難を検討する。さらに、日韓剣道の審判員および大学生選手を対象として「剣道の価値」に関する意識調査を実施し、日本武道学会で発表する。

平成 26 年度は、日韓の武道を比較しながら、剣道の競技化と国際化の課題を検討し、韓国新興武芸の動向を捉える。上記 1)~5) の課題を博士論文の進捗状況とともにまとめる。

## 4. 研究成果

### (1) 剣道における伝統文化論の諸説

①日本剣道 KENDO の国際化に関する先行研究や議論は、日本武道学会を中心に日本剣道 KENDO が欧米諸国でどのように普及してきたのかを、その競技性から検討したものが多し。その前提には、剣道 KENDO を日本文化として尊重する姿勢が保持され、いずれも日本剣道 KENDO を普及展開しようとする方向性が示されている。これは、FIK の最大派閥である欧州剣道連盟の発展と日系人が中心となり設立されたアメリカ・ブラジル剣道連盟に支持されているためである。

②一方の大韓剣道会がめざすのは、韓国剣道 KUMDO の「国際化」であり、日本の伝統文化を保持した形での日本剣道 KENDO の「国際的普及」とは異なる。この方向性の相違は、まさに国際的な剣道の今後の展開に大きな影響を及ぼす。

③本研究では、「文化普遍主義的アプローチ」と「文化相対主義的アプローチ」の 2 つの視点から、日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO をめぐるヘゲモニー問題について考察していく。この方法論は、青木保 (1999) が示した「文化相対主義」と「文化普遍主義」の文化論の枠組みの論理を援用する。剣道を日本の身体運動文化の 1 つとしてとらえるとき、青木が指す西欧中心主義は、日本中心主義に置き換えられる。つまり、「文化普遍主義的アプローチ」は、日本剣道そのものを世界に発信、定着させようとの試みと定義づけられる。他方、「文化相対主義的アプローチ」は、日本剣道と他の国の剣道を共に認め合う試みとなる。

④青木によれば、歴史家が「伝統」というと

ころを人類学者は「文化」と捉えている。すなわち、「伝統」には不可避免的に時間の意識が込められるが、「文化」は「伝統」に較べればはるかに現代的であり共時的である。「伝統」はつねに「革新」される運命にあり、そこには何らかの社会的政治的要因が動く。また「伝統」は極めて意識的にある意図をもって創り出されるが、「文化」は変化するものであり「革新」されるわけではなく、また意図的に創られるものでもない。

## (2) 日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の歴史と現状

日韓の剣道史については、日本剣道 KENDO は全剣連の『剣道の歴史』に、韓国剣道 KUMDO は大韓剣道会の主張に従うものである。

日本剣道 KENDO の始原を全剣連は、平安末期の日本刀の出現とする。

江戸時代(1603-1867)は、戦のない泰平が長く続いた。剣術は戦国時代の実戦とは離れ、形式を尊重するあまり華法化が進行した。この形剣術の行き詰まりから、実戦を想定した稽古のために竹刀と剣道具が登場する。特に、講武所で剣術師範役を務めた男谷精一郎信友が、各流派を統一する形で「しない打ち込み稽古」を実施した。明治維新により武士階級が廃止され剣術も衰退した。1871年の脱刀令、1876年の廢刀令により剣術は廢絶の危機にさらされたが、榊原鍵吉の撃剣興行によって復活した。1945年の第二次世界大戦後は、GHQの指令により「武道」が禁止された。特に、剣道は日本刀に精神性を付与して軍国主義を鼓舞する役割を担ったとして、厳しい制限が課せられたため、「しない競技」と称するスポーツ剣道が誕生した。1950年に全日本撓競技連盟が結成され、1952年に全日本剣道連盟が組織され、1954年には全日本撓競技連盟は全剣連に合併吸収された。以降、剣道の理念と平和思想に基づき、剣道の競技的発展と伝統文化の継承を謳い、女子剣道および FIK を中核とする日本剣道 KENDO の国際的普及を一層推進している。

韓国剣道 KUMDO の歴史を遡ると、剣道(撃剣)起源に関する史料に基づく検証は難しいが、現存する史料に「高宗実録健陽元(1896)年5月23日」の記録がある。そこには1896年に朝鮮の警務庁が日本から剣道具を購入した史実が残されている。さらに1904年には、陸軍研成学校で撃剣教育が行われていたという記録もある。韓国(朝鮮)では、朝鮮王朝末期から撃剣が行われていたと推察されるが、その後、日本(大日本帝国)が朝鮮半島に侵攻し、1910年に日本が韓国(朝鮮王朝)を併合する。併合以前の朝鮮王朝は、自国の近代化と軍事力強化のために、撃剣を採用したとされている。だが、併合後は朝鮮総督府が、軍事強化、警察整備、そして在朝日本人の子弟教育のために積極的に柔・剣道を中心とする日本武道を朝鮮半島で展開していた。1910年から1945年まで35年

間続いた大日本帝国の日本化政策を、自国文化が失われた日帝強占期と韓国では捉えている。そのため、戦後70年を経た現在でも、日本武道である剣道を韓国でそのまま実践することは極めて困難である。そこで、1953年に発足した大韓剣道会では、韓国独自の民族主義を全面に出し、韓国剣道 KUMDO の国際化を推進している。つまり、日本剣道の「刀」はそもそも韓国からその技術が日本に伝えられたものであり、新羅時代には花郎(ファラン)と呼ばれる武士が活躍し、現代剣道の基盤となる世界最古の剣法である「本國剣法」を確立したとして「本國剣法」を復活させ昇段審査に用いている。さらに、日本剣道 KENDO とは異なる韓国独自の方向性として、オリンピック競技であるフェンシングを例に出し、剣道をよりスポーツ化・国際化する方向性を示している。

日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の歴史から明らかになったヘゲモニー問題は、1910年の日韓併合に起因する文化帝国主義的なアプローチによる剣道(撃剣)の導入であった。日本剣道 KENDO 史においては、いっどのような形で韓国(朝鮮)に剣道が導入されたのかが明確にされていないために、今日の日韓の歴史認識に基づく社会的・政治的不安にまで繋がっている。

## (3) 剣道の競技化と国際化の課題

現代の剣道は、競技化され「試合」で剣道技(技術)を競い合うことで成立している。そこで、日韓双方の試合(競技)規則・審判規則を比較することによって双方の技術の相違も浮き彫りになる。WKC は、FIK の『試合・審判規則』(②国際版)に則り競技が実施される。しかし、実際には日韓共に国内剣道規則がある。つまり、韓国には大韓剣道会の『剣道競技規則・審判規則』(①韓国版)があり、日本にも全剣連の『試合・審判規則』(③日本版)がある。つまり、剣道競技には国内規則と国際規則が存在する。上記①から③の3つの『試合・審判規則』を比較検討すると、原則、③日本版が基準となっている。②国際版は日本版の英語翻訳である。2012年 WKC で用いられていた2006年改訂版の②国際版は、1995年の③日本版が底本である。①韓国版は、②国際版を韓国語にほぼ全訳しているが、打突部位の呼称や審判宣告など国際版での日本語は全て排除され、韓国語に置換されている。また、剣道着、審判の服装、審判旗、反則行為など特定の箇所について異なる記述が確認された。

結論として、①韓国版は大韓剣道会が自国に適したルール化を行っていたが、②国際版は、③日本版が底本であるために、韓国の代表選手は国内規則と国際規則の異なるダブルスタンダードの下で競技することになる。①韓国版は、日本剣道 KENDO を払拭するために規則に様々な変更を加えるが、変更を加えれば加えるほど国際規則である②国際版とも遊離していくというジレンマが看取さ

れた。

#### (4) 日本剣道 KENDO の国際的普及における今後の方向性

日本剣道 KENDO の思想について検討すると、もともと日本剣道 KENDO は「和魂」であり、戦後、西洋合理主義のもとで「洋才」を加味しスポーツ化して現代剣道となった。日本剣道 KENDO は、常にこの「和魂」と「洋才」の狭間で「武道」なのか「スポーツ」なのかが問われ、バランスをとって存在してきた。今、この「和魂」と「洋才」のバランスを「ローカル」と「グローバル」という視点から捉え直すと、日本剣道 KENDO は「ローカル」、世界各国に普及し各国の文化の中に存在する剣道は「グローバル」と置き換えられる。この「和魂」と「洋才」のバランスを「文化普遍主義（ローカル）」と「文化相対主義（グローバル）」という視点から捉え直す時、武道の日本的な固有性をことさらに強調することは「文化帝国主義」や「エリート主義」に繋がりがかねない。国際化の過程では、日本の伝統文化が異文化との混合物となり、変容することは文化人類学の知見からも必至である。この必然に対し、全剣連は国際化による日本剣道 KENDO の変容を恐れ、さらに日本剣道 KENDO の換骨奪胎を懸念する。全剣連は他民族に文化の押しつけないとしながら、正しい日本剣道 KENDO を伝達し定着させるという。こうして「文化普遍主義的な方向性」で日本剣道 KENDO の正統性を唱え、「正しい剣道」と称して国際的に展開していくことは困難である。日本剣道 KENDO への理解を異文化の人々に求めるのであれば、文化相対主義的に異文化を理解するための努力や配慮が必要となろう。ある文化が異なる文化と交われば、そこには「文化変容」が起こる。これは当然の帰結であり、剣道文化もその例外ではない。むしろ「文化は変容しうるもの」として、変わらざる最大公約数の部分を見出す努力が肝要である。剣道文化の最大公約数とも言えるのが「剣道の普遍性」であり、剣道の本質となるであろう。この剣道の普遍性を日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO が共に見出そうとする叡智が、今、求められている。

#### (5) 国際化に伴う剣道の価値に関する研究—日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の世代間の相違から—

【目的】身体運動文化である剣道は、日本古来の剣術に依拠し、国際的普及として文化普遍主義を貫こうとする日本剣道 KENDO と、国際化を標榜し文化相対主義に訴える韓国剣道 KUMDO との相克が顕在化している。そこで本研究では、文化的背景の異なる韓国剣道 KUMDO と日本剣道 KENDO に長年にわたり携わる審判員と大学生選手を対象として、両国間における剣道の価値認識を調査し、世代間にどのような相違点と共通点が存在するのかを明らかにしようとするものである。

【方法】日韓両言語による質問紙法を用いた。

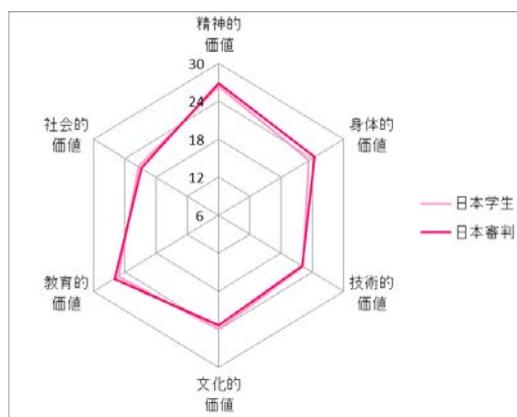
1) 対象者：審判員 223 名（日本人 148 名：韓国人 75 名）。大学生選手 690 名（日本人 507 名：韓国人 183 名）。

2) 調査項目：植原、金、岩切らの先行研究を参考に質問紙を作成した。設問は精神的価値、身体的価値、技術的価値、文化的価値、教育的価値、社会的価値に関する設問の 6 領域、および国際的価値に関する設問の 1 領域とした。質問紙では 5 段階評価（5:とても思う-1:全くそう思わない）で回答した。

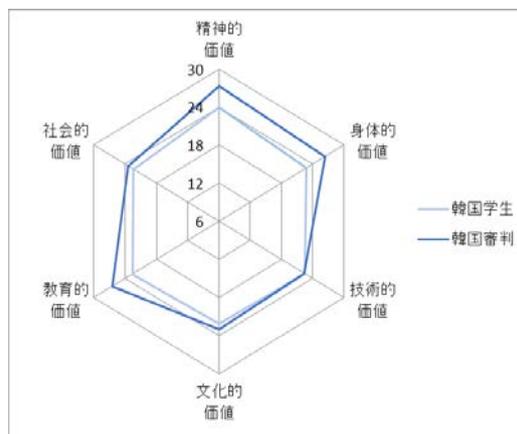
3) 統計処理：各価値項目ごとに、世代間（審判・学生）×調査国（韓国・日本）の 2 要因分散分析を行った。

【結果】審判員の平均年齢は、韓国 48.52±10.47 歳、日本 46.25±11.79 歳であった。男女比は、韓国で男 97.3%：女 2.7%、日本で男 94.6%：女 5.4%であった。剣道歴は、韓国 33.69±10.04 年、日本 35.67±10.36 年であった。段位は、韓国 6.73±1.08 段、日本 6.40±1.19 段であった。学生選手の平均年齢は、韓国 20.36±1.81 歳、日本 19.46±1.22 歳であった。男女比は、韓国で男 94.5%：女 5.5%、日本で男 67.7%：女 32.3%であった。剣道歴は、韓国 8.73±2.85 年、日本 12.10±2.55 年であった。段位は、韓国 2.66±0.59 段、日本 3.08±0.54 段であった。

剣道の価値認識に関する結果は、(表 1) に日本剣道 KENDO を、(表 2) に韓国剣道 KUMDO を示す。



(表 1) 日本剣道 KENDO の価値



(表 2) 韓国剣道 KUMDO の価値  
技術的価値、日本-韓国および学生-審判と

もに差異が認められなかった。しかし、その他の全5項目で日本-韓国に1%水準で差異が認められた。また、文化的価値と社会的価値では、学生-審判で差異が認められなかった。

#### 【まとめ】

剣道の技術的価値には、日韓および世代間で差異が認められなかったことから、共通認識の下に剣道技術が伝達されている。しかし、文化的価値と社会的価値には、世代間では認められない差異が、国籍の相違で認められた。このことから、剣道に対する文化的社会的価値は、その国の志向が反映されている。また、表1と表2を全体的に比較すると、日本では世代間の相違は認められないが、韓国では精神的・身体的・教育的価値に関する世代間の相違が明確であった。

### 5. 主な発表論文等

#### 〔雑誌論文〕(計7件)

- ①小田佳子, 学校現場において教師が有する「体罰」に関する現実的課題, 査読無, 体育科教育研究 30 卷 1 号, 2014, pp.69-74.
- ②小田佳子, IAPS2014 国際スポーツ哲学会第 42 回大会報告, 査読無, 体育・スポーツ哲学研究, Vol.36 No.2 2014, pp.123-125.
- ③小田佳子, 日本の伝統文化としての剣道を考える～武道とスポーツの狭間で～, 査読無, 全国教育系大学剣道連盟ゼミナール剣道, Vol.15 特集「国際交流」2013, pp.41-46.
- ④小田佳子・近藤良享, 日本剣道 KENDO の国際展開への課題—韓国剣道との相克を中心に—, 査読有, 体育スポーツ哲学研究 Vol.34 No2.2012, pp.125-140.
- ⑤近藤良享・小田佳子, スポーツ指導と体罰・暴力, 査読有, 中京大学体育研究所紀要 No.18 2014, pp.1-7.
- ⑥星川保・小田佳子・恵土孝吉, 武道における学習内容としての日本文化・伝統的行動様式とは何か—剣道の有効打突と残心から—, 査読有, 体育の科学 2 月号 Vol.64, 2014, pp.124-129.
- ⑦Yoshiko Oda and Yoshitaka Kondo, THE CONCEPT OF YUKO-DATOTSU IN KENDO: INTERPRETED FROM THE AESTHETICS OF ZANSHIN, 査読有, Sport, Ethics and Philosophy, Vol.8, No.1, 2014, pp.3-15. Routledge, Taylor & Francis Group  
<http://dx.doi.org/10.1080/17511321.2013.873072>

#### 〔学会発表〕(計8件)

- ①小田佳子・近藤良享, 剣道有効打突における間主観的判断の可能性, 日本体育・スポーツ哲学会, 2014.8.19-20「筑波大学(つくば市)」
- ②小田佳子, 国際化に伴う剣道の価値に関する研究-日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の大学生選手の比較から-, 日本武道学会, 2014.9.10-11「福山市立大学(福山市)」
- ③Yoshiko ODA & Yoshitaka KONDO, Dilemma involved in the internationalization of Japanese KENDO -Zanshin in Japan and Jonshim in Korea-, IAPS 国際スポーツ哲学会

2013.9.5-6.「カリフォルニア州立大学 Fullerton (USA)」

④Yoshiko ODA & Dong-chul PARK & Tetsuro INOUE & Yasuhisa MITOMA, Research on the worth of KENDO associated with its internationalization -Comparison of Korean KUMDO and Japanese KENDO- 日本武道学会 第1回国際会議 2013.9.12. 「筑波大学(つくば市)」

⑤小田佳子, 学校教育現場の教師が有する「体罰」に関する現実的課題, 日本体育科教育学会シンポジウム 2013. 6. 22. 「国士舘大学(東京都)」

⑥小田佳子・鈴木康平・近藤良享, スポーツタレントの育成問題(2)～指導者としての元 J リーガ B 氏～, 日本スポーツ教育学会, 2013.10. 19. 「日本大学(東京都)」

⑦Yoshiko ODA & Yoshitaka KONDO, The Concept of Yuko-datotsu in Kendo -From the Aesthetics of Zanshin-, IAPS 国際スポーツ哲学会発表 2012.9.12-15. 「Porto (ポルトガル)」

⑧小田佳子・近藤良享, 剣道にみる残心の美学 日本体育・スポーツ哲学会 2012.8.18-19 「大阪大学(大阪府)」

#### 〔図書〕(計1件)

①小田佳子(他23名)『これならできる剣道 武道必修化時代の“五輪書”』全国教育系大学剣道連盟編, スキージャーナル. 2014. pp.104-111.

#### 〔その他〕

①恵土孝吉, 小田佳子, 星川保, 剣道に暴力はいらない, 剣道日本 2014 年 4 月号, pp. 81-87.

②小田佳子(シンポジスト), たくましく生きる力を育てるために～体罰と暴力を考える～, NPO 日本武道修学院シンポジウム 2014.10.5, 愛知県弥富市総合福祉センター

③小田佳子, 武道必修化での初心者指導法, 全国教育系大学剣道ゼミナール講師 2015.7.7-8

### 6. 研究組織

#### (1)研究代表者

小田佳子 (ODA YOSHIKO)

東海学園大学・スポーツ健康科学部・准教授  
研究者番号: 30584289

#### (2)研究分担者

近藤良享 (KONDO YOSHITAKA)

中京大学・スポーツ科学部・教授

研究者番号: 00153734

#### (3)研究協力者

星川保 (HOSHIKAWA Tamotsu)

愛知県立大学・東海学園大学・名誉教授

恵土孝吉 (EDO Kokichi)

金沢大学・名誉教授